
Fate/BattleRoyal

マンガローブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / B a t t l e R o y a l

【Nコード】

N 9 5 1 0 Z

【作者名】

マングローブ

【あらすじ】

正史とも通常とも異なる冬木の第四次聖杯戦争。七騎所ではない・
・百騎もの英霊が覇を競う凄惨なるバトルロワイヤル・・・
そんな折、令呪を意図せずして刻まれた魔術を使う私立探偵、鳴宮
奏は気のりしないまでも生き残る為に参加を決意し最弱にして最強
のキャスターと共に百組の殺し合いに身を投じる。

登場人物 設定（前書き）

身の程知らずにも・・・いえ、かなり無謀ながらこの度、Fateの二次創作に挑戦して見ました。はつきり、言いますが、私自身、原作の知識は乏しいながらももう好き勝手に書いて見る事にしました。

初めてなので至らぬ事も多いと思いますが、私も原作知識を調べながら書いて行きます！

登場人物 設定

なりみやかなで

鳴宮奏

【年齢】 22歳

【身長・体重】 180? 56?

【特技】 体術などの武術全般、身体強化魔術

魔術を使う私立探偵。令呪を刻まれた事で此度の聖杯戦争に気のりしないながらも参加する事となる。

性格は基本的に仕事以外は無気力でズボラ。だが、異常なまでの身体能力をも誇っておりあらゆる武術と戦闘技術を身に付けている。

口癖は「まあ、一応」

キヤスター

【マスター】 鳴宮 奏

【真名】 不明

【身長・体重】 160? 43?

【属性】 中立・中庸

【ステータス】 筋力E 魔力A++ 幸運C 敏捷B 宝具EX

奏が召喚したサーヴァント。見た目こそあどけない少年だが、その物腰も話し方も子供離れしている。

かなり、飄々とした性格で悪戯好き。さらに現代への適応力も高く電化製品なども数日で問題なく使いこなしている。（主にノートPC、TV、TVゲーム、携帯など）いつ如何なる時も娯楽に興じる柔軟性（図太さ）の持ち主。口癖は「最弱のキヤスター。されど、最強のキヤスターだ」

序幕

ある部屋の床に異様な魔法陣を描き詠唱を唱えている男がいた。その男の外見は眼が隠れる程にボサボサの黒髪に服装は皺くちやのポロシャツにジーパンと外見にはかなりの無頓着さが窺える。

そして、彼の左手の甲には血のように赤い三画の幾何学的な刺青のような物が刻まれていた。それは彼がある凄惨な戦争^{ゲーム}のトロフィーに見染められた証であった。そして、これはその凄惨な戦争^{ゲーム}を生き残る為に必要不可欠な駒を呼び寄せる儀式であった。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。」

^{みたせ}閉じよ。^{みたせ}閉じよ。^{みたせ}閉じよ。^{みたせ}閉じよ。^{みたせ}閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

左手の紋様が発光し儀式がさらに進んで行く。

「^{セリト}Anfang」

「告げる」

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

周囲に風と魔力が立ち込めて行く。儀式はいよいよ、佳境へと入るうとしていた。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

！」

詠唱が終わると同時に凄まじい閃光と暴風が炸裂し次に静寂が訪れた時には魔法陣の中央に一人の少年が立っていた。年齢は恐らく十五・六程。黒のローブを纏い、星のように輝く銀髪に澄んだ碧眼。顔はまだ、あどけないものの、その表情と眼にはとても怜悯な物を感じさせ年齢不相応の迫力がこの少年には備わっていた。

それもその筈、見た目こそ幼くともこの少年はれっきとした『人外存在』に他ならないのだから・・・そして、少年はどこか不敵な笑みを零して口を開いた。

「問おう。君が私を現界せしマスターかね？」

「うん・・・まあ、一応」

呼び出した男は気のない返事で問いに答えた。それに対し少年は眼を丸くして問い質した。

「なんだい。その如何にも気の抜けた返事は？君自身が望んで私を召喚せしめたのではないのかね？」

少年が半ば呆れたように問うと男は男で左手の紋様　令呪を見せてウンザリそうな声音で言った。

「こんな物が唐突に刻まれたら呼ぶ以外にどんな選択肢が？」

「ふむ・・・自らの意思で聖杯を求めたのではなく聖杯の方が君自身を求めたと・・・？確かに難儀且つ災難だったね。まあ、それも運のつきと思つて諦めたまえ」

少年は身も蓋もない・・・そして、さらにこう続ける。

「それに・・・その気になれば令呪を放棄する事とてできたはずだ。にも拘らず、こうして私を召喚したと言う事は君自身も聖杯を求める理由がある・・・と言う事なのだろう？」

それに対し男は渋々と言った声で・・・

「まあ・・・それなりに」

「相も変わらず気のない返事だね・・・まあ、いい。取り敢えずは

マスター。君の名を教えてはくれないかね？」

なりみやかなで
「鳴宮奏……」

「では奏。これで契約は成立だ。共にこの戦争を勝ち残り聖杯を手にしよう。では次は私が名乗るのが礼儀だが、真名は……今は伏せておくでしょう」

奏は相も変わらず気のない声で問うた。

「何で？」

すると、少年は茶目つけ溢れた眼を輝かせて言った。

「その方が謎のサーヴァントって感じでカッコいいじゃないか」

「ああ、そう……」

奏はやはり、気のない声で相槌を打つ。

「まあ、とは言えクラスは教えなければなるまいね。私は今回……と言うより私の能力に相応しくキャスターのサーヴァントとして現界した」

その言葉に奏は少し、不安そうに尋ねる。

「キャスターって……確か、七つのクラスの中で最弱って言う……？」

そうキャスターは七騎のサーヴァントの中で最弱とされている。その主な理由は元が魔術師故に白兵戦には乏しいと言う事……さらに言えばその一番の持ち味である魔術自体も『三騎士』と呼ばれる高い対魔力を備えたサーヴァントには全く、役に立たないと言う事だ。

奏は令呪が刻まれた日から聖杯戦争について出来る限りの事を調べた。故にその程度の知識は持っていたのだ。故に少し、不安になるやっぱり、聖遺物もなしって言うのが無茶過ぎたか……

と、マイナスの事を考え始めた奏に対し少年……いや、キャスターは朗らかな声で言った。

「なに心配する事はない、マスター」

その言葉に奏が不意にキャスターの方を見ると彼は朗らかながらも不敵な笑みを浮かべて言った。

「確かに、この身は最弱の魔術師^{キャスター}・・・されど、最強の魔術師^{キャスター}だ。聖杯は必ずや我らに微笑むだろう」

ここに正史とは違う第四次聖杯戦争が始まった。

第一幕（前書き）

変な所があつたらすいません。

あと主人公チートです。本当にすいません・・・

第一幕

岩に刺さった剣の前に一人の少女がいた・・・少女はその剣を抜こうと手を伸ばした

「それを手にする前にきちんと考えた方がいい」

それを老人の声が止める。老人はこう続ける。

「その剣を抜いたが最後、お前は人ではなくなる。歳もとらず、ただ国の為、王として生きる他なくなるのだぞ」

それでも少女は頷かなかった。老人はさらに言葉を尽くして説得する。

「その剣を抜いた先、お前の前には栄光と破滅が等しく訪れるだろう。それでも尚、その剣を取るか？」

すると、少女は笑って言った。

「多くの人が笑っていました。それはきっと、間違いではないと思います」

そして、少女の人生はそこで終わった

奏はパチクリと眼が覚めソファーから起き上がった。そこは奏が事務所と住居を兼ねている部屋で大抵はここで寝食をしている。現在の時刻は深夜の三時。

さっきの夢・・・もしかして、キャスターの？マスターとサーヴァントは意識がリンクしているから互いの過去夢を見る事があるってアレか？

しかし・・・あの夢って・・・ん？そう言えばキャスターは何処に

奏はふと、自らのサーヴァントの姿が見当たらない事に思い至り辺りを見回す。霊体化しているのだろうかと思っただが、訪ね人はすぐに現れた。それも事務所の入り口から

「やあ、お目覚めかね」

奏はまず、キヤスターが両手に抱えている紙袋を見た。そして、問うた。

「その紙袋は何だ？」

「ああ、これかね？ノートPCと言う物を買って来た。これから戦争が始まる。ならば情報収集は必須だろう」

「ノートPCならとつく家にあるけど。と言うより金はどこから？それ以前に店は閉まっっているだろう」

奏の言葉にキヤスターは少し、ギクツとした後、無駄に爽やかな笑顔で言った。

「それじゃあ早速、設定を始めよう」

と紙袋からノートPCが納められた段ボール箱を取り出す。

無視された・・・

奏はどこか諦めたような顔で嘆息をつく。

一方、キヤスターは素早くPCを取り出し手際良く設定を進めて行く。

と言うか、随分と順応性が高いサーヴァントだな・・・そりゃサーヴァントは皆、英霊の座である程度は現代の知識を得て限界すると言うが・・・それにしたって・・・

「それにしても魔術師キヤスターとも在ろう者が機械を躊躇もなく使うとは思わなかったよ。昨今の魔術師はよっぽどの物好きでもなければ手にも触れないって言うのに・・・」

奏が呆れたように言うときヤスターは設定を進めながら答えた。

「そうなのかね？それはいかな・・・魔術師たる者、視野を広く持たねば。それに引き換え君は機械類にも躊躇なく手を出しているようだね。感心、感心」

「俺は別に仕事をする上で有益と思ったから魔術をかじっただけだよ。別に時計塔の連中のような『根源に至る』なんてご大層な理由で学んだわけじゃないさ」

すると、キヤスターは興味深そうに奏を見据えて聞いた。

「ふむ・・仕事とはどのような事を？」

「探偵だよ」

「ほう・・明智や金田一のようなかね」

「どこで知ったんだよ、そんな事・・・と言うかお前って本当に順応性高いのな・・・生憎と俺はそいつら程、頭が特別いいと言うわけじゃない。有り体に言えば『何でも屋』だな」

「ふむ・・何でも屋？では犯罪の捜査を実際に行っている訳ではないと？」

「馬鹿にするな・・一応、そう言う依頼だつて来るさ」
すると、キヤスターは首を傾げる。

「しかし、頭が特別いいと言うわけではないのだろうか？」

「まあ、俺には頭に代わる物があるからな」

「頭に代わる物・・それは一体・・ッ！」

そこでキヤスターはサーヴァントの気配を感じ、奏もそれに気づく。
「サーヴァントか？」

「ああ、それもこの事務所の真ん前だ・・舐められた物だな。さて、どうするマスター？私のようなキヤスターの一般的な戦い方としては陣地を作って待ち伏せるのがセオリーではあるが・・・」

「お前すっかり忘れてた物な」

奏が若干、青筋を立てて突っ込むとキヤスターはあははと言って誤魔化する。だが、すぐにまた、あの不敵な笑みを浮かべて言う。

「まあ・・慌てる事はないさ。たとえば、この身は最弱とは言え勝算がまったくない訳でもない」

そして、二人が事務所の外へ出ると案の定、二人の男が仁王立ちしていた。一人はラテン系の容姿をしたドレッドヘアーの男性。その

隣には圧倒的な存在感を放つ中華系の武者が控えていた。武者はとも大きな体軀をしており鮮やかな紅髪を後ろに二つに分け結び、赤を基調にした鎧を纏っている。

ドレッドヘアーの男性が出て来た奏達に対し口を開く。

「へえ・・こっちの誘いを蹴らずに出て来るとは中々に剛毅じゃねえか。取り敢えずは初めましてだな、俺はアレックス・マリオン。こっちは俺のサーヴァントのランサーだ」

ランサー・・選りにも選って三騎士クラスか・・それにしてもアツサリとクラス名を明かして来たな。それだけ自信があるって事か。

今度はランサーの方が口を開く。

「次は貴様らが名乗るのが礼儀と思うが？」

その鋭い一瞥をまともに喰らった奏は内心、気圧された。

凄い迫力・・ッ！改めて思い知るが、これが英霊^{サーヴァント}かッ！！

奏は敵の覇気に吞まれそうになりながらも名乗る。

「俺は鳴宮奏。こっちはサーヴァントのキャスターだ」

すると、ランサーはフンツと鼻を鳴らして吐き捨てた。

「選りにも選って、最弱のキャスターとは・・・つまらん」

すると、キャスターも挑発するように笑った。

「ふっ、早計は余り、感心しないな。如何にこの身是最弱でも戦いようがない訳ではない」

「ほう・・」

ランサーが値踏みするような眼で見るとキャスターはその威圧がこもった視線を物ともせず奏に言った。

「マスター、宝具の開帳を許して貰いたい」

その言葉に奏は静かに頷く。すると、キャスターは右手をかざして魔力を放出し宝具を具現化させる。その形が露わになった時、この

場にいる全員が眼を疑った。なんと、それは剣だった。一振りの剣は岩に刺さった状態でこの場に具現化されたのだ。

この剣はさっきの夢で見た・・・

そう、この剣はまぎれもなく奏が先程、見たキャスターの過去夢で少女が抜いたであろうあの岩に刺さった剣であった。

それを見た一同は驚愕する。白兵戦とは無縁に等しいキャスターが剣の宝具を持つなどと・・・！！

「これぞ我が第一の宝具『勝利すべき黄金の剣』^{カリバーン}！！さあ、マスターよ。この剣を取れ！」

「え？俺がツ！？」

奏が思わず面を喰らうとキャスターは大声でさらに促す。

「早くッ！」

その声に奏は半ば、自棄になってその剣・勝利すべき黄金の剣の柄^{カリバーン}を握り岩から引き抜いた。すると、その剣から大きな魔力が魔術回路を通して身体中に流れて行くのを感じた。

この宝具・・・もしかして

奏の考えを読むようにキャスターが肯定する。

「そう・・・これは私自身が使う事を想定された宝具ではない。この宝具の真の意味はマスターとの契約を結んだ後にこそある」

「つまり」

奏は勝利すべき黄金の剣を手にはランサー目掛けて突撃する。その無謀とも言える行動にアレックスもランサーも面を喰らうが、それも一瞬だった。奏は人間とは思えない速さと剣戟を繰り出しランサーはそれを紙一重で避けた。

「マスターを強化する為の宝具って事か・・・一応」

奏は相も変わらず気のない声だったが、その戦闘態勢は微塵の隙も

なかった。それを見たランサーはこれは決して一筋縄では行かない事を察した。

「主よ、こちらにも宝具を開帳するぞ・・・あの小僧・・・宝具で強化された事は勿論だが、あの小僧自身の力量もまた、侮れん」

「へいへい、あんたの方が戦闘のプロだ。任せるよ」

アレックスは溜息を付きながらも渋々了解した。ランサーは右手にその巨軀に相応しい巨大な戟を具現化させた。

あれって方天画戟って奴か・・・と言う事はあのランサーの真名って・・・

「考え事とは余裕だなッ！」

そこで奏の思考は途切れた。ランサーの凄まじい突きが迫って来たからだ。しかし、奏はそれを考え事の途中だったにも拘らずそれを読んでいたかのように避けた。これにはランサーもかなり、驚いたのか眼を剥いている。奏はその隙にと剣戟を繰り出すが、勿論、そう易々と殺らせる程、ランサーは甘くはない。忽ち戟をその刃に合わせる。

そこからは凄まじい剣戟の打ち合いだった。随所に火花が飛び散り、互いに際どい一撃を何度も繰り出して行く。その場に他のマスターやサーヴァント達がいたら皆一様に驚愕したろう。何せ、生身の人間が如何に宝具の助けがあるとは言え、サーヴァントと互角に戦うなどと・・・

しかし、一番に驚愕しているのはランサーの方だった。

この小僧・・・多分に宝具の助けがあるとは言えこの俺とここまで打ち合えるとは・・・ほぼ互角・・・いや、僅かに俺を圧してすらいる！

それにこ奴の動き・・・まるで、俺の繰り出す斬撃の一つ一つを見透かしているかのようではないかッ!?

そう見透かしているかのようにではなく現実に見透かしているのだ。これぞ奏が頭脳に代わると言った奏自身の起源『予知』であった。奏はそれによって対象や物事の事象を先取りする事によってあらゆる捜査を遂行し時には障害に成り得る人間を打ち倒して来たのだ。おまけに彼は身体の強化に特化した魔術師でもある。さらに、そこへキャストの宝具による強化補正によって今の奏の戦闘力はサーヴァントに迫る物となった。

「チッ！調子に乗るなッ！！」

ランサーは一際大きな力で戟を振るい奏を薙ぎ払う。奏は後ろに吹き飛ばされながらも綺麗に着地する。

一方、ランサーは一層に鋭い視線で奏を射抜く。

「小僧・・・遊びは終わりだ」

そう言った途端に戟の形状が弓の形に変化した。

「なッ！」

奏が面食らっているとランサーは殺気がこもった声で弓へと変化した己の得物をつがえながら言った。

「小僧・・・お主の技量、人間風情の身でよくぞ、ここまでと誉めてやる。だが、貴様ができるのも所詮はここまで・・・我が宝具『

ゴッドフォース

軍神五兵』のスキル・・・ゆみ、きそつがちなし必中無弓によって引導を渡してくれる」

そう告げた瞬間にランサーは矢を放った

第二幕

弓と化したランサーの宝具軍神五兵から巨大な弓矢が常人などでは到底、眼にも止まらぬ速度で放たれた。

奏は己の起源『予知』と身体強化魔術を最大限にまで酷使用する。巨大な弓矢がかなり速めのスローモーションとなって奏の視界に映る。奏は宝具勝利すべき黄金の剣を突き構えて繰り出し弓矢の軌道をギリギリで逸らし、弓矢は近くの建物に直撃した。

ランサーはそれを見て感歎の声を上げる。

「ほう・・・今のは紛れもない必殺の一撃だったのだが・・・つくづく楽しませてくれるな人間。だが、二度目も同じように出来るか？」

そう言つてランサーは再び矢をつがえる。奏も再び、臨戦態勢を取る・・・が、その戦いを一つの声が押し止めた。

「おいおい、いけないなあ。こんな街中で戦闘なんて・・・公衆の面前において魔術の行使はご法度のはずだろう？」

その場にいた四人はその声のする方を振り向くとそこには貴族然とした服装に身を包んだアッシュブロンドの短髪の男がいた。そして隣には白銀の鎧を纏った如何にも騎士然とした青年が控えている。恐らく彼のサーヴァントなのだろう。

一方、アレックスはその男を見るや・・・

「アンシエルッ！ テメエまでこの戦いに」

「アレックス・・・それはこちらのセリフだよ。落伍者である君が無謀にも聖杯を求めようなどとはね」

アッシュブロンドの男 アンシエルが嘲笑も露わに言うのアレックスは乱暴な身振りで怒鳴る。

「うるせえッ！ そっちこそボンボンが実戦に出ようなんて笑わせるぜ・・・いつそここで首を落としてやるつか？ ああッ！？」

すると、アンシエルはほとほと呆れ果てたと言わんばかりの声で言った。

「その前に君達自身の首が監督役や他のマスター達の手によって落とされるとは考えないのか？この惨状を見たまえ」

そう促され自分達の周囲を見ると先程の弓矢を別方向に逸らした結果、逸らされた弓矢が直撃した家が全壊していた。それに耳を澄ませば周囲も騒ぎ始めていた。

アレックスも舌打ちしながらも漸く自分の迂闊さに気付きランサーに霊体化を命じてその場を後にした。そして、場には奏とキャスター、アンシエルと彼のサーヴァントのみが残った。

アンシエルは奏を値踏みするように見つめた後に口を開いた。

「初めましてだね・・・鳴宮奏くん。私はアンシエル・ジルヴェスタ
ー。こっちは私の従者であるセイバーだ」

アンシエルの紹介を受け白銀の騎士 セイバーは自らも名乗る。

「お初にお目に掛かります。アンシエル様の従者を務めるセイバーと申します。どうか主の良き好敵手で在らん事を」

「は・・・はあ」

奏は思わず間の抜けた返事をしてしまう。だが、アンシエルは含み笑いを浮かべながらも言葉を続けた。

「それにしても先程の戦闘だが、実に恐れいったよ。宝具の助力があったとは言えサーヴァント相手に・・・それもあの呂奉先を相手に互角に渡り合うとは・・・」

「あんたも気付いてたのか？ランサーの真名を」

「それは勿論、あの方天画戟の宝具を見て気付かない方がどうかしているだろう」

その口振りだと今まで自分達の戦いを見物していたらしい。

「諷めておいてその実は見物か・・・狡猾だ事で」

奏が皮肉を込めて言うアンシエルは意にも介さず笑いながら、いけしゃあしゃあと言った。

「はははは、お陰でかなり興味深い物を見れたよ。なあ、そう思う

「だろっセイバー」

突如、話を振られたセイバーは僅かに眉を動かすが、何も語らない。奏はそれに少し違和感を感じたが、アンシエルはそれで話は終わりだと言わんばかりに背を向けて最後にこう言った。

「それでは私はこれで失礼するよ。そして、鳴宮くん・・・気を付けたまえ。此度の第四次聖杯戦争は過去の聖杯戦争とは何もかもが違う」

その言葉に奏とキャスターが訝るとアンシエルは口元をにたりと歪めて告げた。

「私の調査で本来、七人のみに配当される令呪が私達を含む百人の魔術師に配当された事が判明した」

「は？」

奏は思わず間の抜けた声を出した。『何の冗談だそれは？』と言わんばかりに・・・だが、アンシエルは確信がこもった声でさらに続けて言う。

「つまり、百騎もの英霊がこの冬木の地に召喚され覇を競い合う・・・」

・今だかつてない文字通りの大戦争となる。当然、それだけの数の英霊達が戦うのだ。被害や爪痕は冬木の地だけには止まるまい。日本全体・・・いや、下手をすれば」

「ちよと待て。在り得ないだろう、そんなの・・・いくら聖杯が『万能の願望機』だからってそんな数の英霊を現界させるなんて事ができるわけ・・・」

「フッ、在り得ないかどうかは君自身も直に分かる事だろう・・・尤も君達がそれまで生き残っていればの話だが。それでは次は戦場にて相見えとしよう」

それだけ言うとセイバーを伴い去って行った。

「マスター、私達も行くでしょう。残念だが、君の家に戻る事はもうできない。彼の言が本当ならば君の周囲が危険に晒されよう。それに彼が言っていたように直にここへ人が来る」

「ああ」

キャスターに促され奏はその場を後にしながらもアンシエルの言葉を頭の中で反芻する。

百騎もの英霊サーヴァントが殺し合う？笑えない冗談だな……

それと同時に……

「で……どうだセイバー。アレはやはり、本物なのか？」

アンシエルが問うとセイバーは簡潔な調子で答える。

「はい、ランクこそ劣化していますが、アレは紛れもなく私のかつての王が持つべき宝具。少なくとも、キャスターが所有する謂れなどない宝具です」

すると、アンシエルは面白そうな顔になって言った。

「ふむ……かつて、騎士王の臣下だった君としては心外なのかね？サー・ガウエイン」

「いえ……ただ、解せないと言うだけの事です我が王。私は貴方の剣。そこに余分な感傷など一切ありません」

セイバーは理路整然と答える。ますます面白いと言わんばかりにアンシエルは笑みを広げた。

「ふむ……それで君はあのキャスターに見覚えがあるのかね？」

「いいえ、初めて見た顔です。私の知る限りにおいて円卓の騎士団にもあのような者はおりませんでした」

その答えにアンシエルは一瞬、考え込むような顔になるが、それもそこまでだった。すぐに決意に満ちた顔になって己の騎士サーヴァントに告げる。

「そうか……まあ、その件はいい。それよりもこれからの戦略を練らねばなるまい」

「御意」

セイバーはそう答えたが、内心は驚愕と共にある懸念を抱いていた。

あのキャスターに見覚えがない……と言うのは嘘ではない。事実、

私はあのような者の顔は知らない。だが、あのキャスターの雰囲気と佇まいは誰かを思い出させる・・・

いや、そもそもアルトリア様以外であの剣を宝具として持ち、且つ魔術師のクラスと来れば該当する英霊など私の知る限りにおいてはたった一人しか・・・いや、まさかとは思うが・・・

セイバーは疑念を抱きながらも考えを打ち消し主の後に従った。

「まず、これからの戦いを勝ち抜いて行く為に先程、君が使った宝具について説明しておく」

拠点を変えやつと、落ち着いた時、キャスターがこう切り出した。

「ランサーとの戦いで君が使った宝具『勝利すべき黄金の剣』は私が使った事を想定された宝具ではないと言ったが、これには語弊がある」

「と言うと？」

「要するにアレは本来、私が所有する宝具ではない。アレは元々、ある剣の英霊が持つべき宝具なのだ」

「それじゃあどうして、魔術師の英霊であるお前がそれを持つてるんだよ？」

尤もな問いだ。白兵戦向きではないキャスターのクラスが剣の宝具を持つなんて道理が本来あるはずもない。

「まあ、私もあの剣には多少なりとも縁があったのでね。一応は私の宝具として昇華されたのだから。それはそうとアレの宝具としてのスキルだが、第一にマスターである君が武器として使う魔術礼装となる事。第二にそれによって一時的に身体能力などがサーヴァントにも迫る程に強化される。この二点だ。もっとも、それとて本来の用途ではない。故に宝具としてのランクも本来よりも劣化しているし何より制限時間も設けられている」

「制限時間か・・・もっともだな。そんな都合のいい物であるはずもない・・・で、その時間はどれくらいだ？」

「ジャスト五分。先程はかなり、ギリギリだった」

キヤスターがキツパリと答える。すると、奏は苦笑して言った。

「要するに俺はアンシエルに救われたって事だな・・・あのまま使っていたらどうなっていた？」

「恐らく宝具から流れ込んで来る魔力の圧力に魔術回路が耐え切れずオーバーヒートを起こしていただろう」

「そう言う事は召喚された最初に言ってくれ・・・」

アツサリと今頃になってそんな事を言ってくれる己のサーヴァントに奏は頭をかきながら嘆息を付く。

「この際に聞くが、お前は他にどんな宝具を持っているんだ？」

「秘密だ」

キヤスターは意地悪く即答する。これには流石の奏も苛立った声で詰問する。

「おいッ！お互いの命がかかっているんだぞ！」

「教えた所でどうなる訳でもない。私の宝具は対魔力を持つ三騎士クラスにはほぼ効かないし、まあ、とっておきの宝具なら話は別だが、とっておきだけあってあれは魔力の消費量が激しい・・・その上、一度でも使えば私の真名も瞬く間に敵に知れよう。ましてや、此度は七騎所か百騎ものサーヴァントが参加するともなれば先は長い。少なくともこのような序盤で手の内を晒すべきではない」

「そりゃそうだが・・・」

「とりあえず、今日は眠るといい・・・明日からは戦争だ」

今日ばかりは己のサーヴァントの言う通りにするかと奏は再び、眠りに付く事にした。そして、奏が寝静まった後、キヤスターは一人佇むように呟いていた。

「百人の魔術師に百騎のサーヴァントか・・・やれやれ、何やらきな臭くなってきたな・・・」

その頃、ある人気のない納屋では一人の男がサーヴァントの召喚に臨もうとしていた。

男の名は間桐雁夜。本来なら御三家の一角、間桐家の頭首となるはずだった男・・・だが、間桐の陰惨な魔導を嫌い家を出奔した。その後は普通の日常を手に入れるはずだったが、雁夜自身でも何故かは分からないが、独学且つ独自に魔術の修練を積み始めた。何故かは雁夜自身も分からない・・・だが、その時は間桐の家を離れて尚、そうした方がいいと思えたのだ。

そして、今・・・その直感は決して間違いではなかった事を雁夜は知る。

幼馴染でありずっと自分が想いを寄せて来た女性・・・遠坂葵。その娘である桜が選りにも選つて間桐の家に養子に出されたと言う・・・あの糞爺の下に・・・ッ！

間桐の家を出た時、自分は余りにも無力だった・・・だが、今は違う修練は元より経験も積んだ。さらに言えば己の右手に現れた令呪だ。聖杯戦争の参加者に配当されると言う魔力の塊・・・これならサーヴァントを召喚し使役できればあの化け物を・・・間桐臓硯を倒し桜ちゃんを救う事ができるかも知れないッ！

雁夜は藁にも縋るように召喚の為の魔法陣を描き詠唱を唱えた。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

そこで雁夜は呪文を付け足す。いくら修練を積んだとは言え時臣と言った他の参加者に比べたら自分の魔術師としての技量は些か劣るまして、それが聖遺物なしとなれば尚の事。ならばステータスの大幅な底上げがどうしても必要だった。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者」

いよいよ召喚は大詰めだ。雁夜はさらに力を込めて最後の一節を唱える。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

暴風と閃光が納屋を包み静寂が訪れるとそこには禍々しいまでの漆黒の魔力に包まれた黒甲冑フルプレートに身を包んだ大柄の騎士が立っていた。

やった・・・成功だッ！

雁夜は召喚が成功した事に安堵の笑みを浮かべたが、次の瞬間にその顔は驚愕へと染まった。何故ならば

「今再び・・・問おう、貴殿が私のマスターに相違ないか？」

言葉など知らぬはずの狂戦士バーサーカーが口を開き問うていた・・・

第二幕（後書き）

雁夜さん・・・かなり改竄しています・・・本当にすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9510z/>

Fate/BattleRoyal

2012年1月1日21時48分発行